

深川木場

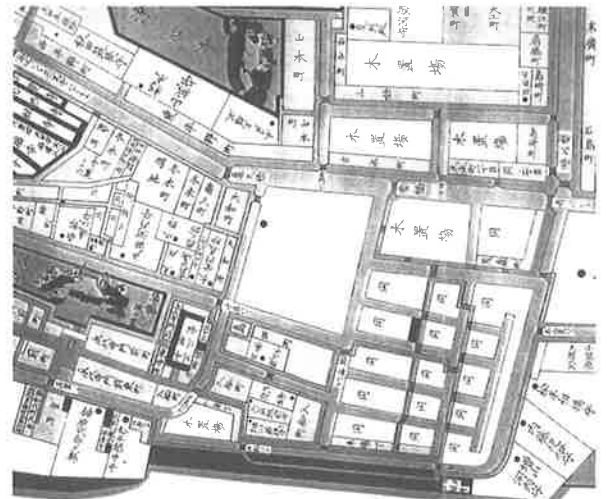
江東区深川江戸資料館

川並かわなみ（筏師いかだし）による角乗りきやりや木遣で知られる木場は、5代将軍徳川綱吉の時代に完成し、材木商の拠点として江戸時代を通じて発展しました。

1 木場の起こり

江戸に幕府を開いた徳川家康は、慶長9年（1604）その政庁となる江戸城の修築と拡張に着手しました。幕府は築造に必要な巨木や良質の木材を伐採運搬させるため、駿河・三河・遠江（愛知・静岡の一部）及び紀伊（和歌山）から材木商人を呼び集め、これに協力させました。修築工事が終わると、幕府は実績のあった者に対し、材木商の免許を与え、彼らは日本橋・神田辺りに住んで店舗を構え営業を始めました。

しかし、明暦の大火（1657年）で大きな被害を受けた幕府は、防火のために江戸市中から離れた深川元木場（佐賀・永代・福住周辺）を選びました。これは江戸市中に近く、人口も少なく、水運の便がよいことが理由にあげられます。この時に材木置場を置く材木商は21軒ありました。ところが、元禄12年（1699）元木場の土地を幕府が取り上げて地盛りをして改めて払い下げがありました。この元木場の代地として深川築地町（木場・平野・三好一带）を与えられたのですが、そこは低湿地であったため、自力で干拓工事を請負いかねたので、これを返上し猿江に移ったのです。しかし、そこも2年後には幕府御用地となったので、干拓工事も大体完成していた深川築地町のうち、約9万坪余の土地の払い下げを受け、材木問屋たちが自費で土手を築き、堀を廻らし橋を架け、材木置場を設けて移りました。ここに、江戸第一の材木集団として繁栄する深川木場（現在の木場公園一带）が成立します。この移転について『御府内備考』には「(前略) 元禄十四巳四月材木問屋拾五人之者御築立場残地之内四圀の所江戸町並同家同前



本所深川絵図（文久2年）

家作御改御免之町屋敷ニ仕度（後略）」とあり、この15人の問屋といわれるとおり、木場は以後はつきりと15区画に分かれていました（「本所深川絵図」参照）。正徳3年（1713）深川一帯は町方支配となり、江戸市内同様の町屋になりました。

2 木場の発展

木場成立時には材木商たちの本店は日本橋周辺に多く、木場にはまだ材木倉庫しかありませんでしたが、元禄初年（1688）の頃より次第に深川へ移るようになりました。元文4年（1739）江戸材木問屋総人名に株式を定めた頃は12名あり、以後これくらいの人数で組合を作り商売を行いました。このように深川木場といえば材木問屋というようになってきたのは、幕府の政策により江戸市中より移されたのですが、この辺は水路へ海水が満潮の時に差し込んで来るため、材木に虫がつかないという好条件に恵まれ、かつ、材木の運搬に便利な水路が縦横に発達しており、江戸名物の火事も少なく、その被害を受ける心配もないことから、貯木場として江戸という材木の消費地には不可欠のものとなったからです。

さて、材木商たちの取引が成立すると、その材

木をまとめて運搬するのが川並と呼ばれる筏職人です。彼らの役目は、筏にして運んだ材木を芝・神田・浅草方面などの陸上運送業者の所まで長カギ1本で運ぶことでした。この長カギで材木を引っ張ったり、押したり、廻したり自由自在に材木を操りました。この妙技ともいえる技が「角乗り」で、彼らは仕事の合間に角材に乗り、身の軽さを競うことを娯楽としていたので、その技術を活かして祭礼とか御祝儀のあるごとに「角乗り」の技を奮い、この日のために普段から技を練っていたそうです。天保の頃にはかなり有名になっていました。

江戸時代の木場は材木商の店舗邸宅が多く、これらは凝った造りをしており、また各家手の込んだ庭園も造られ、水辺の景勝地として江戸の人々に愛され、安藤広重をはじめ多くの絵師によって様々な木場の風景が描かれました。また、材木商には富豪の者も多くおり、元禄の建築ブームに乗って大儲けをした紀伊国屋文左衛門（紀文）や奈良屋茂左衛門（奈良茂）などがそれです。この他、木場は閑静であったので、別荘が建てられ四世市川團十郎や七世團十郎もここに住み、八世團十郎はこの木場で生まれました。

3 明治以降の木場

維新の混乱もようやく落ち着きをみせた明治4年（1871）材木商は、東京材木問屋組合を結成し、木場の営業が復活しました。しかし、問屋と仲買、荷主の関係は江戸時代のままで、取引様式や商慣



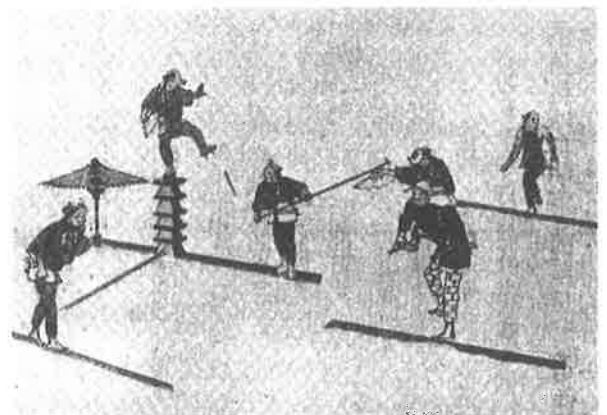
木場材木問屋（『木場名所図会』）

習も変わらず、この状態は明治30年（1897）頃まで続きます。この時代、近代資本の木材業界の進出が始まり、材木問屋の仲買・荷主に対する支配力は減少してゆきました。大正12年（1923）の関東大震災による木場の被害は大きく、罹災工場や焼失木材は想像以上のものでした。

震災の復興もようやく成った昭和8年（1933）頃になると、従来の問屋と仲買との旧組織関係がなくなり、問屋は専門化するようになります。しかし戦争が激化するにつれ、木材統制法の施行などにより、材木屋は昭和17年（1942）前半には廃業せざるを得ず、伝統を誇る木場の問屋・仲買組織も解散し、木材の生産・配給・消費の本格的な統制時代となりました。

4 新木場の誕生

昭和30年代より始まった高度経済成長は、木場に繁栄をもたらしましたが、新しい問題が起きました。木場の移転問題がそれで、主な理由は周辺の地盤沈下、近代化などの用地不足、交通事情の悪化や公害、風水害による原木流出の危険等々、多くの問題が発生したからです。こうした中、昭和33年（1958）「木場移転建設協議会」を設立し、昭和47年（1972）頃より移転が開始され、昭和57年（1982）には新木場に全て移転し現在に至っています。



角乗り（『木場名所図絵』）